

朝鮮

家族は張家口から私は京城から

石川県 木村道夫

一 昭和二十年夏の京城

朝鮮半島の氣候としては、六、七月中異常に長かった梅雨の後、炎天の続く八月だった。

その十五日正午、終戦の詔勅が放送されたのに、市街地は深夜に至るまで意外なほどに静寂な一日だった。

ところが翌十六日は、早朝から京城の街という街、通りという通りは昨日までとは一変し、人の波で埋まっていた。人々は、これまで見たこともない太極旗や赤旗を掲げて口々に叫んでいた。「ジヨソン ドクリ

プ マンセイ(朝鮮独立万歳)」こうした人の波は街路上のみならず、市内電車、トラックなどの車上にまで満載され、次々に走っていった。

そしてその声も、やがて「ジヨソン ヒヤッググション マンセイ(朝鮮革命万歳)」に変わり、午後になるとどこからともなく「ソ連軍と連合して、金日成將軍が人民義勇軍の抗日パルチザンとともに、京城駅に到着する」といううわさが人々に広まりだした。こうして群衆の隊列は、いつしか京城駅前広場に向かう流れに発展していった。この間日本人は、群衆の視線を避け、沈黙を守り、外出を慎むほかには有効手段を打つことができなかった。

いままら反省すべくもなく、日本人が朝鮮半島を支配した期間は、併合のあった明治四十三(一九一〇)

年からの三十五年間だけでなく、さらに三十四年前の明治九（一八七六）年、不平等に締結させた江華条約（日朝修好条規）後の日本人進出まで加算すると、六十九年間に及ぶほか、十六世紀末の豊臣秀吉による朝鮮遠征にまでさかのぼると、朝鮮民族が日本人を「倭奴」と憎悪してきた心情まで察知されるのである。加えて、この十年間などは皇民化政策ということで、各家庭への神棚設置の強制、創氏改名、内地移送、陸海軍兵への強要などと朝鮮民族にとっては、面白くないことばかりしてきたことが想起されて、取り返しのつかぬことばかりだった。

同日夜、深夜に至っても金日成の南進はなく、十万人の大集合も霧散していった。

九日参戦のソ連軍は、急進撃して北朝鮮の雄基、羅津、清津などを十二日に陥落させていた。元山や平壤への進駐は二十日だったが、ソ連軍司令官チスチャコフ大将が「朝鮮人民よ……解放万歳」との布告文を発したのは、二十二日のこととなっている。ところが、南下を続行するかと思われたソ連軍の隊列は、三十八

度線上の開城に到着した二十三日以降の前進を停止してしまうのである。

また十六日には、京城に展開された民衆デモのエネルギーも、翌十七日、第十七方面軍と呼称されていた在鮮日本軍が兵隊だけでなく、戦車や装甲車を動員して市内の要所所の警備を始めたために当分の沈黙を余儀なくされた。それから米軍が進駐するまでの間、市内ではこうした奇妙な平和というか均衡状態が保持されたが、これは日本軍がやがて武装解除されることを理解した朝鮮民族の賢明な行動だった。それ以降朝鮮民族側では、建国準備の運動が展開される反面、日本人側は世話人会を組織する活動を始めたのである。

二 昭和二十年秋九月の京城での生活

九月になり、京城では朝夕の気温が低くなり、秋の気配も日ごとに深まってきた。

本土では、二日に東京湾上において、米戦艦ミズーリ号にて降伏の調印式が行われたというのに、半島の南部では朝鮮民族の建国準備運動が顕在化してきた程度だった。けれども北鮮や満州から着のままで

日本人同胞の南下が目立ってきた。初めは列車でくる人が多かったのに、いつしか徒歩でくる人のほうが多くなり、日本人世話人会の仕事が多忙になっていった。

ところで私は、昭和十八年の四月以降三年間就学の京城葉学専門学校に在校しており、当時は三年生だったが、戦時教育の特例として繰り上げ卒業日が九月十五日に予定されていた。けれど終戦日以降は休校状態であり、それ以前も平常なら夏休みのところ、勤労動員のため、級友は朝鮮内の各地に散開していた。私も、七月以前は北朝鮮の羅津付近に動員されていたのだが、志願していた陸軍入隊のため京城に帰還中だった。八月初めに合格通知書の交付があったが、入隊の日時・場所は後日通知ということで、待機中に終戦となった。とはいえ、入隊準備者ということで、特配の餅や清酒などの支給があったことも思い出される。私の学費は全部、内蒙古の張家口市に居住していた両親からの送金に頼っていたのだが、六月にまとまった額を受け取ったきりになっていた。

九月八日、京城の西南にある仁川港に上陸した米軍

が、ジープを連ねてやってきた。

そして翌九日には、日本軍が朝鮮総督府の代表者との間で降伏式が執行された。この時点で武装解除された軍人たちは、直ちに復員輸送されて帰国していった。また、総督府の行政権限は全部アメリカ軍政庁に移管されたのである。この結果、京城残留の日本人は文民（軍人でない人）のみとなったが、世話人会と軍政庁との交渉により、計画的に輸送帰国されることとなった。私は、十月末ごろ帰国という割り当てをうけた。

ところで、これまで学校は休校状態だったが、鮮内各地の動員先から帰還した同級生には、登校次第「卒業証書」が授与されているという風聞が入ったので、登校すると、「第一一三九号」という卒業証書の交付を受けることができた。このときの同期生は、日本人八十人のほか、南鮮、北鮮の朝鮮国籍学生三十五人がおり、計一一五人ということだった。

私が終戦後、京城に居住した期間は約三カ月だったが、何の危害もなかったし、送金途絶にはなかったが、生活資金は何とかすることができた。それはアルバイ

トのほか、米軍労務に従事して幾ばくかの給金を得ていたからである。これらは在満州やシベリア送りの同胞たちと比較すると望外の幸運だったと思ひ、今もなお多謝している。

三 日本への引揚げ

終戦の日以降八・九月は毎日がこれまでになかった体験ばかりだったので、日時の経過が予想外に早く、またたく間に十月になってしまった。断片的に入ってくる内外ニュースも、驚くことばかりだった。邦字新聞の発行はあったが、配達中止されたので、毎日早朝に街頭に出て購入する必要があった。

それでも、関東軍や開拓団が全滅し、満州国が崩壊していることや、広島・長崎に投下された大本営発表の新型爆弾は原子爆弾だったこと、日本ではほとんど都市が、空爆や艦砲射撃のために被害甚大なことなど、報道項目の理解はできた。しかし、臨場感がないために市民の心身がどんな状態に陥っているのかなど、具体的なことになるかと判然とせずにもどかしいかぎりだった。さらに私にとって関心事だったのは、内蒙古

の張家口市に居住する両親や弟妹たちの動静だったが、これは遠いかなたのことで、半ばあきらめるより仕方がないことだった。とはいえ、日本では東久通宮内閣が成立したが、マッカーサー元帥の到着、GHQの設置、陸海軍の解体などの後、内閣総辞職となり、十月四日には幣原内閣が成立したことなど、当時の外地居住者としては比較的豊富な情報を得ていた。

ところで私は、京城での生活を、竜山区岡崎町に住していた、九州は大牟田市出身の知人宅の二階に下宿してお世話になっていた。同家には、夫妻と幼児・乳児各一人の四人に加えて、婦人の弟嫁（弟は出征中）と私との六人が住んでいた。それが終戦とともに、東朝鮮の日本海沿岸に出征していた本人の弟さんが復員して同居されたので七人となり、まもなく、京城工專に在学中の私の友人が転がりこんできたので八人となってしまった。九月下旬には、京城の南部で漢江の対岸永登浦に居住しておられた婦人のご両親が、周辺不穩を理由に転入されてきたので、総計十人という大所帯になった。

この家はちょっとした高台にあって、京城駅が眼下に見下ろせる所だったので、下町にくらべて平穩に過ごせる利点があった。もちろん食糧問題があったが、戦後ともなれば駅近くの南大門市場などに軍用物資の放出品なども加えて多くの物資が出回っていたので、すべてが金次第ということだった。

こうした状況の中で、十月中旬の某日（どうしてもこの日付が思い出せない）突然に、「明朝、竜山駅始発の貨車に便乗すれば、帰国可能」との知らせが入ったので、家人はそれぞれの荷作りに着手した。けれども「リュックサック一個程度」ということでは迷いが先行し、どうしてよいのか、詰め込んで出しを繰り返しているうちに時間だけが過ぎていった。この状況は、海外にあった日本人引揚者に共通のことだったろうが、周辺からの銃撃や強奪など皆無だったのはよかったと思う。

翌朝、京城駅の向こうには、仁旺山、北漢山、三角山などの岩稜が望見され、天高く澄みわたった秋晴れの日となっていた。京城での生活がたったの二年有半

の私でも、感無量だったのに、二十有余年以上この地で生活された家人が、全家財を捨てての引揚げという事実への無念さはひとしおのことと拝察された。朝食もそこそこに竜山駅への歩みとなったが、幼児、乳児二人を連れての行動は大変だった。

竜山地区には、明治以来、一個師団の日本軍が駐屯していたので、竜山駅はその兵站駅だった。そのためか、何条もの側線があり、当日は数編成の列車が入り乱れて並列していた。

このため、号車指定があっても、指定列車にたどりつくまでに意外な時間浪費があったりして、発車も正午すぎになってしまった。無蓋編成の列車もあったが、私たちには有蓋編成の列車が割り当てられて安心した。けれども有蓋となると、また別の問題があることが発車後に発見されて、一時大騒ぎとなったが、時間とともに何となく解決していった。飲料水は、あらかじめ多量に持参したが、用便には閉口した。

既に何回か往復した経験では、京城―釜山間は急行で十時間程度だったのに、私たちの貨車は各駅停車、

停車時間不定のために二十五時間以上を要し、釜山駅着は翌日の夕刻になってしまった。このころ関釜間には浮遊機雷があるので、航路は夜間閉鎖されており、釜山港前の広場での露天仮泊となった。けれど飯盒で炊爨できたので、これまでの握り飯、乾パンから解放されて、手足を伸ばすことができたのが取り柄だった。翌朝、日章旗を掲げた小型船に乗り込むことができた。当初はあまりにも小型なので、沖に停泊の大型船に移乗のためかと思っていたのに、そのまま港外でてしまった。

船員に聞くと、この船は、もともと島通いの乗合船だったが、船舶不足のため動員されたものだという返事に加えて、小型船の方が機雷などには安全なのだという励ましを受けた。でも、玄界灘での「揺れ」は激しかった。従来の関釜連絡船では、所要時間六時間だったのに、この小型船は十時間以上を費やし、日没時に博多に入港した。

着岸、上陸後は簡単な検疫後にDDTの散布。携行品調査があった後、京城から持参したアメリカ軍政府

長官アーノルド少将発行の証明書を提示し、日本側証明書の交付を受けて、集団行動を解散した。お世話になった知人夫婦は、大牟田市に帰還するので再会を約束して別れることとなった。私は、同夜半に博多駅で仕立てられた引揚者専用の大阪行きが無蓋車編成の列車に乗り込んだ。

その後、それぞれが生活再建に日数を要して、再会できたのは、昭和三十八年になってしまった。

四 帰国後の状況

博多駅を出た列車は、のろろ運転で関門海底トンネルを通過して本州に入ったが、無蓋の列車では、寒さが身にしみた。でも数日來の過労から、いつの間にか深い眠りに引き込まれていった。

夜明けに、とある駅に到着した。見渡すかぎりの焼け野原で、果てしない惨状が見られたので「広島かな？」と直感した。駅員に聞くとその通りだった。

思えば私の一家は、昭和十二年春から夏にかけて広島に居住していたのである。その春、満州に赴任することになった父が、様子を見るために単身渡満して、

現地で居住地を確保するまでの間、広島に妻子を残し、条件が整い私たちが渡満させるため父が帰国したのは、同年七月のことだった。やがて夏休みとなり、宇品港で乗船し、門司、大連を経て大陸に渡ったのである。当時私は、小学校の六年生だったのに八年後のいま、再び目前にした広島の光景は、見るも無残であった。

昭和十二年七月七日には、蘆溝橋事件があり、日中戦に突入したわけだが、当時は、広島はもとより大連から北上した満州各地の風情も平穩であり、平和な風景一色だったのに、今となってはすべてがわずかの期間に咲いた「あだ花」だったことを痛感したのである。

さて、私たちの無蓋貨物列車は、さらにのろのろと東上を続けて、どうにか大阪に到着したときは深夜になっていた。ここで私の京城での下宿に転がり込んできた友人とわかれたが、彼はその後、和歌山に居住することとなった。

私は、帰還先を祖母（父の母親）の居住する富山市南部の農村に仮定していたので、大阪始発の富山方面行きの北陸線に乗車する必要があった。始発までにい

くらかの時間があつたので、駅で仮泊すべく適所を探したが、浮浪児たちが各所を占領していてどうにもならず、駅員に引揚証明書を提示して交渉すると、既に入線していた空の列車に乗車を許可されたので、内地での第二夜を熟睡することができた。

やがて夜明けとなり発車したが、これまでの貨車とは異なり旅客車両なので、「揺れ」も少なくて車窓からの風景を見るという旅の気分を初めて味わうことができた。といっても、区間によっては、食料などを抱えこんだ大荷物の客が慌ただしく降り降りして満員になつたりした。でも、対面する乗客と雑談ができた気分は格別だった。そのうちに会話の中で、終戦直前にあつた富山大空襲の話になり、それに驚いたが、この予備知識のおかげで、夕方富山に着いたとき、意外な落ち着きを得ることができ、駅前のヤミ市を見物する余裕もあつた。

駅前からは「笹津行き」という国鉄バスに乗り、約四十分で「下大久保」という目的地に到着できたが、予告していなかつたので、いくら祖母の家でも他の家

族のこともあり、しばらくの滞在になるかもしれない私を受け入れてもらえるか?といった疑問が頭をかすめた。けれども玄関に入り、一言二言話しているうちに、この心配は氷解し、温かく迎えられてこたつに入り、夕食となった。話だけが土産という一夜だった。

思えば京城―富山間のこの数日間の旅は、私の人生にとって二度とない体験だったし、これからもあつてはならない種類の体験であると思う。

五 私の生い立ち

私は、大正十五(一九二六)年三月十八日、北海道の札幌市で生まれ、「道夫」と命名された。

父は師範学校の教員だったが、旧制中学校に転じて稚内に居住したりしていた。この間に小学生となったが、当時は尋常小学校といっていた。昭和六(一九三二)年九月、大陸で満州事変が起こり、翌年三月には満州国が成立したのである。その四月が入学の年だったが、北海道の大地で伸び伸びと育てられたように思う。

昭和十二年新春、突然、父に満州国赴任の打診がき

た。その結果、二月には一家をあげての転住になった。このとき私は、六年生になる寸前だった。

こうして雪の稚内を離れたのだが、いきなり一家そろうての満州とはいかず、父だけの単身渡満となり、準備ができ次第、家族移住という段取りになり、私たちは母子家庭となり、広島市にしばらく居住することとなった。このとき稚内―札幌―東京―富山―金沢―広島と、生まれて初めての長旅を体験した。とりわけ北陸は父の出身地でもあったので、二―三泊滞在し、広島に着いて小学校に転入したが、すぐに六年生になってしまった。

昭和十二年の夏、宇品から門司、大連を経て船で渡満した。そして、一年間、哈爾濱(ハルビン)で居住したが、これまた母子家庭だった。というのは、ここから列車で約二時間、浜綏線(ヒンスイセン)で下った地点の阿城にあった師範学校が父の勤務先で、同地には日本人の小学校がなかったためである。けれども土・日には父が帰毛したので、広島よりは母もずいぶんと気楽だったように思う。

夏が過ぎ、秋、冬となったが、私の哈爾濱花園小学

校六年生という期間は、あっという間に終わり、翌年春に中学校を受験することになった。

昭和十三年、新設間もない哈爾濱日本中学校（旧制の五年制だった）一年生になったが、この夏、阿城から齊齊哈爾への父の転勤があり、一家をあげて齊齊哈爾へ移住した。私だけが哈爾濱での下宿生活となった。でも、中一の子供では下宿生活になじめず、二、三カ所を転々とする始末だった。

哈爾濱での中学生生活を心配した父は、中二進級時に旅順中学校への転入手続きをしたので、その後の四年間は、同校の生徒として過ごすことになった。この中学校は、日露戦争後四年目という明治四十二（一九〇九）年に創設された、関東都督府中学校という名の大陸最古の中学校で、二百数十人を収容するマンモス寄宿舎を持った学校だった。生徒も、旅順在住者に加えて全滿の各地から集まってきた者とが入り乱れて学級編成されていた。

この学校で昭和十六年に四年生になった夏、齊齊哈爾在住の父をはじめ家族は、蒙古連合自治政府の首都

だった張家口市の、日本居留民団に転職移住となった。ちょうど夏休みになるときだったので、私は旅順から北上し、齊齊哈爾から南下する一家と奉天にて合流して北京經由で張家口に行く予定で出発した。奉天での再会までは、計画どおりだったのに、北京行きの列車時刻が不定期になってしまった。というのは、後世にも悪名の高い関東軍特別大演習（関特演）が発動されたためだった。

しかし、不通ではないので、可能な列車を乗り継ぎ、北京に到着して一泊できたときの思いは格別だった。張家口というのは、北京から八達嶺で長城線を越えたのち、急行で約六時間、北西に進んだ所にある都市だが、街の北方には峰を縫うように外長城線があり、市中にある大境門から外を見ると、果てしない平原砂漠が見える北辺の地だった。

八月末になったので旅順に戻ったが、そのときは「関特演」の影響は無く、列車は時刻表通り運行されていた。北京からは特急「大陸」に便乗した。これは北京―奉天―安東―新義州―平壤―京城―釜山間を二

日間で直通する長距離列車であり「興亜」とともに毎日二便が往復していた。平壤といえ今は、遠い外国の地名になってしまった。後日、私が京城の学校に進学した折にもこの便を利用した。旅中の場合には、奉天下車にて哈爾浜や新京方面から南下する急行に乗り継ぎ、大連経由で帰校、帰舎した。

同年十二月八日には、真珠湾攻撃が始まる太平洋戦争への突入があったが、この報を私たちは、寄宿舎の朝食時に聞いた。

昭和十七年の春、いよいよ五年生に進級したが、級友のなかには三年または四年修了で軍関係の学校に入ったりした者もあって、同級生の人数が激減した。でも軍事教練がきびしくなった程度で、後年のような工場動員などもなく、昭和十八年春の卒業日を無事迎えることができた。

中学卒業後、ひとまず張家口に帰ったが、折り返し専門学校などの入学試験のため張家口を発った私は、釜山から連絡船に乗って下関から内地に渡った。そして富山、金沢、京城の各校を受験し、張家口に戻った。

この時、富山にきて祖母の家に一泊したことが、終戦後の引揚げに直結できたのは幸運だった。

昭和十八年といえば、その二月にはガダルカナル島からの日本軍撤退ということがあったが、いまだ太平洋上の防備も堅く、内地の人たちの表情も明るいし、旅館宿泊なども容易であった。

この受験旅行後、張家口に戻ると合格通知書が届いていたが、京城であれば大陸―半島と地続きの利点もあるとの判断から、京城薬学専門学校への入学を決定し、再び京城に戻って登校したが既に四月十日になっており、入学式から一週間遅れになっていた。こうして京城での二年有半の生活が始まった。けれども四月十八日には、山本元帥の機上戦死があり、前途への暗い予感がないでもなかった。

今でも、昭和十八年秋の神宮外苑グラウンドで開催の出陣学徒壮行会の映像を見ることがあるが、私たちも京城グラウンドに集結して行進する十二月入営の文科系学徒を壮行した思い出がある。理科系ということで、私には入営延期の恩典はあったが、十九歳になっ

た昭和二十（一九四五）年の年初には徴兵検査を受けた。

六 父・家族の引揚げ

北京の西北方に山脈があり、八達嶺と呼ばれる所に内長城線が走っている。これより以北で、外蒙古（一九二一年ソ連の援助で独立）以南の砂漠や平原の多い地域を内蒙古という。

内蒙古の中央線からいくらか南部に小山脈が走り、ここにもまた、外長城線があるが、その谷のような所に清河という流れがあり、その河畔にある街が張家口である。

その市街地西北方には、長城線を切って大境門と呼ぶ門があり、その外を見ると、外蒙古に連なる果てしない平原が眺められ、ときにはラクダの隊商の休む風景が見られたりしたものである。この張家口が、昭和十四（一九三九）年九月末以来、蒙古連合自治政府を組織した首席「徳王」の首都ということだった。

もともとこの政府は、日本軍の指導下に成立しており、日本人の顧問が多数配置されていたが、首都とも

なれば終戦時約十五万の人口を算していた。軍関係者を除く日本人は約二万人だったが、各地から引揚げのあった終戦直前には、四万人に膨らんでいたようである。在留の人たちは、治外法権下で居留民団という行政的な自治組織をもっていた。

日本人学校として国民学校が二校、中学校・女学校が各一校ずつあったので、その学事担当者として満州国立の師範学校で教員をしていた父が赴任したのが、昭和十六（一九四一）年のことだった。父はやがて、そのうちに民生一般まで担当することになっていったようである。

私も、張家口には何度か帰省したが、満州よりは寒暑の差も少なくて冬の雪は皆無であり、夏は湿気が少なくなくて酷暑を覚え、空気が乾燥して夜空の美しい所だった。

父にすれば、赴任四年目にして終戦に直面したのが、その前にソ連参戦という予想外のことがあって大変なことになったらしいが、私の体験ではないので、平成七（一九九五）年に九十六歳で天寿を全うした父の遺

稿集から当時の状況をまとめてみたい。

昭和二十年八月九日、ソ連の対日参戦。ソ蒙連合軍としての大部隊が、大興安嶺、内蒙古北部などから南侵を開始する。

八月十一日、奥地居住の日本人が、張家口に避難のため大集合する。一応、第一国民学校の体育館に収容後、各家庭に分散割り当てのうえ仮泊さす。(こんなことが断続的に十四日まで続く)

八月十五日正午、終戦の大詔を聞き呆然となる。何も仕事を手につかず、放心のうちに一日が終わる。

八月十六日、蒋介石総統の声明が発表されたと聞く。「中国在住の日本人は現状のままとまれ。生命、財産は保障する」といっても、重慶軍進駐以後の食糧事情悪化が心配なので対策を協議、民団で集められるだけの食糧を集め、各所帯に分割配給してしまうことに決める。

そこで三井、三菱などの倉庫に満載されていた穀物を放出して、民団裏の空地に集積し各隣組別に区分、

荷車かトラックで袋ごと分与する作業に着手、十九日まで続く。

八月十七日、大境門外北約十六キロメートルにある張北付近に進出したソ蒙軍が、同地域守備の駐蒙軍(警兵団)に対し張家口入城のための降伏を要求するが応ぜず、重慶軍に対して降伏予定を主張するので対峙状態となる。張北南部にあった丸一陣地の守備線を強化し、張家口在住の日本人が引揚げを完了するまで死守する戦略を全軍に周知する。

怒ったソ連軍は、十七日午後には張家口を空襲し爆弾を投下していった。これで「引揚げの早急実施」ということになり、今後身辺整理につとめ二十一日から二十三日の三日間に分けて町外れの隣組から順次立ち退き、北京・天津方面へ避難するという計画を策定した。八月二十日の正午すぎ、市街地に騎馬憲兵が走り回って「日本人は非常カバンのみ携行し、直ちに国民学校運動場に集合すべし」と突然の指示を叫んでいた。何事かと次々に集まってきた群衆への指示は、「ここは駄目だから駅へ転進せよ」との命令に代わっていた。

一同嘩然となったが、仕方がないので駅に向かうと、駅員が手分けして無蓋車に乗車の指示を与えていた。

私たちも、四人がやっと座れる空間を確保したが、どこへ行くのかという不安な気持ちで沈んでいた。なかなか発車しないので考えているうちに、職員の給料を役所のロッカーに入れたままにできたことを思い出した。後日、みんなから請求があったときのことを思うと取りに行かねばと思った。そこで、妻子が泣いて止めるのをふり切って下車し、走りに走って役所に戻ったが、異常なくロッカーから袋を取り出すことができた。駅には数編成の列車があったのを見ていたので、後から追及する覚悟で公舎に立ち寄り、仏壇やその他の所から重要と思われる品々を取り出し袋づめしているうちに日没になってしまった。急に、異常な空腹感がわいてきたので、ままよと炊飯に着手して一人だけの夕食を食べて、横になったとたんに睡魔が襲ってきて、そのまま熟睡してしまった。

やがて夜も白々と明けてきたので、人影まばらな静かな通りを駅に向かって行った。途中で騒いでいる人

たちがいたので、何事か？と問うと、広島旅館の女将が放火し、気が狂って投身したとのことだった。どうも、覚悟の自殺らしかった。

ともかく駅に行くと「あの列車が最後だから早く早く」とのことで大急ぎで乗車した。昨日、数列もあつた貨物列車は、一編成も残っていなかった。走行開始一時間ほどで、宣化駅に到着してみると、昨日発車の列車が、ほとんど全部構内に並列、縦列してはいないか。そこで、あちこちを見て回るうちに家族に再会できたので合流した。周りの人に事情を聞くと、昨日発車の列車は、八路军の妨害があって前進できずに停車してしまつたとのこと。なお、今後は、夜間には駅で停車して昼間だけ徐行して、北京に向かうのだという。こうして遅々たる南進が始まつた。食物は、駅々で守備隊員たちが、投入してくれたので助かった。

こうして四昼夜を費やして、天津駅に到着したのが二十四日の夕刻になっていた。ここでは、雨中进行進して漫路国民学校に入り教室の割り当てを受けて以後、四カ月間の難民生活が始まつた。

昭和二十一（一九四六）年の新春、LST型の米軍船舶にて佐世保經由帰国となったが、駐蒙軍の人たちは、全居留民の引揚げを確認してから陣地を撤収し、行軍で南下して武装解除をうけたそうだ。ソ連軍は、張家口入城をあきらめて撤退したそうである。

七 本土での再会

私は前年の晩秋に富山に帰還していたが、しばらくは放心状態となり、慢性的な下痢に悩んだりしていた。けれど、いつまでもブラブラしているわけにいかず、薬専の卒業証書を持って富山県庁薬務課に出頭した。当時は、指定校卒であれば国家試験を省略して薬剤師の免許がおりる法律になっていた。そこで修業年限三年間の課程を二年半で卒業というハンディから、交付の可能性について若干の疑問があったが、免許状交付申請を申し出たわけである。ところが、その点では問題がなかったのに、申請人が未成年者では具合が悪いから「交付は明年の六月になる」という指導があって、申請書は条件付受理になった。徴兵検査も済んでいるのにと思ったが、理由にならなかつた。こんなことで

その日暮らしをしているうちに越年となった。「リンゴの唄」をラジオで聴いていたように思う。

そうこうしているうちに、金沢から突然の電報が届いた。「ムネヨシ（父の名） カナザワニツク ミチオ（私の名） イルカ ヘンジ タノム」とあったので、さっそくに返電したら折り返し電話がかかってきて、日時を約束し金沢対面となったのが、昭和二十一年の一月某日（日付を忘れてしまったのが残念）だった。元気で対面しただけで満足感があり、交わす会話ももどかしかった思い出が残っている。

父母弟妹計四人の一行は、長い旅路の後、佐世保に上陸し、金沢にきてからは母の実家（金沢市南部の農村）に落ちついているとの話で、さっそくそこに行くこととなった。

ところで、同家には、大阪から疎開中の別家族も同居しており、私どもの方は、弟妹の就学のこともあったので、若干の家財、衣料、寝具などを分けてもらい、転住することになった。運搬は同家の復員直後の長男と私とで荷車で行うことになった。母の兄（伯父）が

金沢の商家の二階を借家契約してあったので、そこへ移住したわけである。荷物運搬は晴天の日を選んで行ったが、一月とあれば手も凍える思いの片道二十キロメートルの往復だった。でも、同じ頃、シベリア送りの同胞が木材運搬に使役されたことと対比すると幸運だったことが、今しみじみと思ひ出されるのである。こうして、金沢での生活となったわけだが、当初は、雪も多いのにな燃料不十分に加え空腹な毎日だったことは我慢のいることだった。

八 おわりに

四月に入り、兼六園の桜も咲き、やわらかな陽ざしの日々となり、生活がしやすくなるべきところ、食生活の貧しさは一向に改善されなかった。ただこの年の日本海では、イワシの大漁が毎日続いていたのが幸せだった。そのころ、金沢の各家庭では「ごはんの代わりにイワシを」といって焼いたり煮たり、みそ田楽かイワシ団子……と、多彩な料理法を駆使したのだった。また、そのうちにタケノコの季節となり、大陸では口にするにもなかった味を楽しむことができるように

なった。そのうちに新じゃがが出回ってきたりで、日ごとに食膳も豊かになっていった。

こうしているうちに、富山県庁からの来信があり、出かけて行くと、忘れかけていた薬剤師免許証が到着していた。見ると「登録番号五二二〇八、昭和二十一年六月一日厚生大臣〇〇〇〇」とあった。おかげでその後の就職も可能となり、今日に及んだわけである。

あの終戦の日から満一年未満で、私たちの一家はここまでできることができた。まだまだ不十分だったが、ひとまずの生活の基盤を得たのである。爾来じらい五十有余年の今日「引揚者」という言葉は、死語になったが、その体験と思ひは私の心に沈潜している。とはいっても私たち一家の体験は幸運な方だったと思う。あの日、どこにいたのか、何歳だったのか、何校に在籍していたのか……。わずかな個人歴の違いから運命に大差を生じ、生死を分けたのが戦争だった。そう思うときに、自らの幸運に感謝しつつも、犠牲になられた各位のご労苦をしのび、敬意を表したい。

このごろ戦後五十周年を期しての、同窓会があった

が、各人が、それぞれに不幸だった体験を秘めて快活に話し合い、現在の幸福を語り合う様相には、時の流れの効用を痛感した次第である。

それにしても各人の胸に秘められている体験には、鮮烈なものがあると思うし、二度と繰り返されてはならぬものである。どうか各人の思いをもって「平和の礎」を築きたいものである。

朝鮮の生活十年間

愛知県 祖父江 筆 男

全州師範学校へ

昭和十一年一月、満鉄（南満州鉄道株式会社）農林部門への入社を夢見て、満鉄大阪出張所で採用試験を受けた。私の父は当時愛知県食糧検査技官として農林業務に携わっていて、家業も小規模経営ではあるが兼業農家として生計を維持し、村での生活も楽な方であったようだ。私が農林学校を卒業したときは、父は四十

五歳であった。まだまだ若いもんには負けんぞと至極意気軒昂で、「人間は若いうちに苦勞しておくもんだ」と、私の海外雄飛に大いに賛同してくれた。昭和十一年度の採用条件には「長男は除く」との項目がなくなっていたので、学校からの受験推薦者六人の一人として採用試験に臨んだが、長男はやはり駄目であった。私とA君は無念の思いに唇をかみ、その不遇に涙した。そんな失意のとき、担任の先生に、朝鮮に新設予定の官立全州師範学校を紹介されたのである。渡りに船との思いで、同年二月上旬、勇躍渡鮮、京城で入試に臨み、二月末の合格発表では無事入学許可の通知を受けとることができた。

新設の全州師範学校は、急な建設計画のためか諸準備に手間取り、二カ月も遅れての開校となってしまう。入学式もその分遅くなり、確か六月五日であったと記憶している。

当時、朝鮮における学童の就学率は約三十パーセントと低く、これを一挙に五十パーセントまで引き上げようとの計画であったようだ。そのためにはまず教員